



TITLE:

<大會抄録>唐の太上天皇について

AUTHOR(S):

岡野, 誠

CITATION:

岡野, 誠. <大會抄録>唐の太上天皇について. 東洋史研究 1990, 49(3): 594-594

ISSUE DATE:

1990-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154332>

RIGHT:

れ、起源ないし出現の背景・生成過程など發生論・段階論的な視點・分析が看過されてきたことに起因しているものと考えられる。そこで、本發表では都督制度の起源と生成過程の追求に考察の焦點を合わせて如上の問題點に迫り、できれば六朝時代における政治權力と軍事制度の關係、地方統治の在り方についても言及したいと思ふ。

唐の太上皇について

岡野 誠

中國社會の歴史的特質を理解するうえで、皇帝制の解明が、最重要課題の一つであることは言うまでもない。

皇帝權は、たてまゑとして、至高無上のものと稱されるが、現實的には、貴族（官僚）・外戚・宦官等の諸勢力によつて、しばしば掣肘侵害されたことは、よく知られたことである。

ただ、たてまゑと現實という二元論を適用する前に、皇帝權そのものの在り方を、より具體的に考えてみる必要がある。その一方法として、本報告では、唐代の太上皇の在り方に焦點をあて、太上皇と皇帝という問題に限定して、若干の私見を述べたいと思ふ。もちろん、その前史として、秦漢以來の太上皇についても簡単にふれる。

唐代では、高祖・睿宗・玄宗・順宗の四人が太上皇となつてゐる。この四例のうち、報告者が最も興味を抱くのは、玄宗の事例で

ある。

周知のごとく、肅宗の靈武における即位は、安祿山の亂のため、玄宗が蜀へ逃避する時期と重なつてゐる。玄宗から皇太子（のちの肅宗）への傳位の事實、即位に關する詔・冊文資料にはいくつかの矛盾がある。これらを解明することによつて、肅宗即位後の政治的事件（例えば永王璣の亂）もより一層理解できるのではないだろうか。

漢代更卒制度の再検討

——服虔・濱口説批判——

渡邊 信一郎

漢代の地方的徭役たる更卒制度については、その就役様式・就役期間・就役義務年限・更賦との關係など、多くの論點について様々な理解が提示されている。その中であつて、如淳説の批判的検討を通じて服虔説を支持した濱口重國氏の所説が廣く受け入れられており、今日の通説をなしている。服虔・濱口説によれば、漢代更卒制度は、兵役就役者以外の成年男子（二三歳—五六歳）が負擔する一年一箇月宛の地方的徭役であり、これに自ら就役する場合を踐更、免役錢三百錢を納入して免番するのを過更とするものであつた。

踐更・過更を含む就役様式についての服虔・濱口説は、單純明快であるため正鵠を射ているかのごとくである。しかし問題は、いま